

## 2年目を迎えたコロナ禍の学校経営

新宿区立落合中学校校長 岩永 章

東京都公立中学校教諭，東京都公立中学校教頭，東京都公立中学校夜間学級副校長を経て，東京都公立中学校校長二校を経験，区教育委員会指導課長を経て都内公立中学校校長に戻り二校経験，元東京都中学校長会会長，日本教育会東京都支部支部長。

### 環境整備と体制づくりの1年目

昨年は，3月に全国一斉臨時休業が発令され，コロナ対策に追われた一年間でした。学校にはこれまで経験したことがなかった対応が求められ，教職員が総力を挙げて対処した記憶が残っています。このことが教職員の結束力を高め，今年度の学校経営につながっていると受け止めているところです。

本校では昨年度のさまざまな工夫と努力により，少しずつ感染防止体制が整い，後半には日常の教育活動を取り戻し始めました。そうした中でも多くの行事が中止となりましたが，卒業式を行えたことは生徒に大切な思い出を残すことができたと思います。

### 感染拡大2年目を迎えて

今年に入っても感染拡大は収まらず，緊急事態宣言が繰り返される状況になっています。こうした事態を受け，昨年度を「感染防止のための環境整備と体制づくりの年度」，今年度を「環境を生かし，体制を機能させ，生徒の判断力・行動力を育てる年度」と位置づけ，「コロナ禍での教育活動の継続」を意識した学校経営を進めています。ここで今年度重視している方針や実践を紹介します。

#### (1) 昨年度の感染防止対策の見直しと徹底

現在の感染状況は，感染経路不明の方が半数以上を占めることから，誰もが感染する可能性があると思えました。まず，校内から感染リスクを排除する対策を教職員で見直しました。送風機の設置による強制換気など環境整備面，手指消毒やソーシャルディスタンスの徹底など生徒指導面について，転入教職員も交えて再確認することから始めました。

#### (2) 積極的な情報発信による協力体制の構築

感染の要因で家庭内感染の割合が高いことから学校における感染防止には家庭の協力が不可欠になっています。そこで，新型コロナウイルスに関する情報を積極的・計画的・継続的に発信し，保護者の協力体制の強化に努めています。この取り組みにより，家族に体調が悪い方が出た場合に念のために生徒を自宅学習させるケースも増えてきています。これまで学校から発信した内容として，

「感染防止基本姿勢」，「感染防止への協力依頼」，「宿泊行事実施の判断基準」，「都内・区内の感染状況」，「国・都・区の感染防止対策・指針」，「生徒会の感染防止活動」などとなっています。

#### (3) 生徒の判断力・行動力を育てる取り組み

感染防止に最も大切なことは，「学びの主体である生徒が感染防止の大切さを自覚し，自ら適切な行動をとれる力を育てること」と考えています。そこで，「マナーとしてのソーシャルディスタンス」というキーワードを全校生徒に伝え，生徒が毎日の学校生活で感染防止の大切さを感じ，自分たちができることを考え，行動に移すことを生徒にも求めました。すると生徒会が早速「新型コロナウイルス感染防止キャンペーン」を始めました。「自分たちにできる感染防止対策」を共通課題とし，各委員会から企画が提案され，できることから直ちに行動に移す場面が見られました。生活委員会の休み時間の「ソーシャルディスタンスの呼びかけ活動」により生徒が声をかけ合う場面が日常的にみられるようになってきました。その結果，授業でも積極的に発言する生徒が増えるとともに，互いの意見を尊重し合う関係ができ始めています。

#### (4) 生徒の学びを止めないための方策

感染などにより生徒が自宅で健康観察をしなければならない状況を想定し，GIGAスクール構想で貸与されたタブレットパソコンを活用しています。そうした生徒のクラスの授業を同時配信し，自宅でも授業に参加できる体制が組みました。この授業配信を，別室登校している生徒や不登校状況の生徒にも活用を呼びかけ，少しでも教室の雰囲気を感じ取れるようにしました。授業配信という新しい学習環境が，教室で学びにくい生徒たちにとっても学びの保障に繋がっています。タブレットパソコンの整備が早まったことを好機ととらえ，今後もさまざまな活用方法を研究していきたいと考えています。

### コロナ禍を転機に

現在，コロナ禍という特別な状況ではありますが，こうした時期だからこそ新しいことにチャレンジできるととらえ，新しい学びを創造する1年間にしたいと思っています。\*

## コロナ禍における校内研究と異校種間連携

台東区立上野中学校長 上原 一夫

東京都公立中学校社会科教諭から新宿区教育委員会指導主事、東京都教育庁指導部指導主事・同統括指導主事・同主任指導主事、新宿区教育委員会指導課長、東京都教職員研修センター課長、台東区立柏葉中学校校長を経て現職。

### 校内研究の背景

グローバル化する社会や急速なIT化など変化の激しい世の中で、自分の考えや意見を根拠をもって述べるのが大切である。また、新学習指導要領や台東区教育ビジョン等において異校種間連携や0歳から15歳までを見通した子供の資質・能力のスパイラルな育成が求められている。そこで、本校では令和元・2年度、国立教育政策研究所教育課程研究指定校を受け、忍岡こども園、台東区立忍岡小学校との3校園による連携を行い、「自分の考えを提案できる子供の育成」に取り組むこととした。

### 異校種間連携を通じた研究の取り組み

令和元年度は、主に「主体的な学びとは何か」、「主体的な学びを実現するための取組とは」、「主体的な学びを実現する上での課題は何か」等について異校種間での合同研修を行うとともに、地域や国際理解をテーマにした連携カリキュラムの検討をした。そして、令和2年度は次の(1)、(2)の実践を行った。

(1) 全教員が教科指導の中で生徒に自分の考えを提案できる力を育成するために、生徒が主体的に追究できる学習課題と、根拠をもって自らの考えを述べる場面の設定を行った。たとえば、第1学年の数学「資料の活用」では、「AさんとBさんの100m走20回分のデータをもとに、どちらか1人をリレーの選手に選ぶならば、どちらを選ぶか」という学習課題を設定し、生徒が主体的にデータを分析し根拠をもとに考えを述べる場面を設定していた。

(2) 各教科の中で育成した資質・能力を実際に活用する場面として、小中学校間を繋ぐ地域学習カリキュラムと国際理解カリキュラムを作成し、総合的な学習の時間において実践した。なお、国際理解に関しては、昨年度コロナ禍の中、外国人講師を招くことができず、また学区域の上野公園周辺にも訪日客がほとんどいなかったため、カリキュラムを作っただけで終わってしまった。地域学習カリキュラムについては次の①～③の手順で実践した。

①忍岡小学校の代表児童4名を本校に招き小学校における地域学習の取組の発表を第1学年生徒が聞くこ

とで、小学校までの学習の振り返りを行った。

②第1学年生徒が、生活班毎に台東区観光ボランティアと地域巡検を行い、地域の特色を学び、各自の考える地域の素晴らしさについてパワーポイントにまとめた。

③学級内でプレゼン発表会を行い、最優秀班が学級代表として学年全体で発表し、その中で優秀な2班が忍岡小学校へ行き、第6学年児童に発表した。また、他の班の発表もオンラインで小学校へ配信した。

### 研究の成果と課題として残ったこと

異校種間連携を通じた校内研究を行うことにより、次のような成果があった。①異校種間で共通して主体的な学びを促す学習課題と、根拠をもって自らの考えを述べる場面を設定するとともに、小中を繋ぐ地域学習カリキュラムに取り組むことにより、スパイラルに資質・能力を育成する手掛かりがつかめた。②異校種間で直接交流をすることにより、中学生が小学生よりも更に詳細で地域の素晴らしさを伝えられるプレゼンをしたいという思いを強くもつなど、児童・生徒間で学習に対する意欲の高まりが見られた。③台東区では、令和2年度中に一人一台のタブレットが配付されたので、オンラインを活用した異校種間交流も可能となった。

一方、次の点が課題として残った。①根拠をもって自らの考えを述べるためには、ある程度の知識・技能の定着が必要である、また、表現力に欠ける生徒には、個別の継続的な支援も必要である。②昨年度はコロナ禍のために児童・生徒間の交流はもとより教員の合同研修も極めて困難であった。また、台東区では区立中学校への進学にあたり学校選択制を採用しているため本校に入学してくる児童は例年20数校に及んでおり、小中学校間での連携が極めて困難である。そこで、今後それらを解決するためには、オンラインの有効活用が一層求められる。

③今後も生徒に確かな学力を育成するために、授業改善と異校種間連携を継続することが大切である。こども園とは、職場体験以外にほとんど連携がなかったため、今後は継続的な連携を模索していく。\*

# コロナ下の日々を通して

世田谷区立下北沢小学校統括校長 大字 弘一郎

東京都公立小学校教諭から葛飾区教育委員会指導主事、渋谷区立本町小学校副校長、渋谷区教育委員会統括指導主事、同教育政策担当副参事、指導室長・教育センター所長、世田谷区立山野小学校長を経て現職。

## 臨時休校

令和2年2月27日の夕方、当時の安倍晋三総理大臣から全国一斉の休校要請があり、本校では、3月2日より臨時休校となりました。本区では当初、臨時休校期間を2週間としていましたが、その期間は春休みまで延長され、6年生を送る会をはじめとする卒業関連行事はすべて中止とせざるを得ませんでした。卒業式は大幅に人数を絞り、時間を短縮して実施することができましたが、令和2年度の入学式を行うことができたのは、2か月遅れの6月6日でした。

予想をはるかに超えて臨時休校は3か月に及び、その間、学校は子どもたちの学びと生活を支えるためにさまざまな取り組みを進めました。定期的に教材を配布すること、電話連絡等で家庭とつながり、子どもたちの様子を把握すること、教職員がアイデアを出し合い学校ホームページを充実させること、オンラインによる授業や朝の会、学級会などを試行することなど、新型コロナウイルス感染症状況下という、これまでに誰も経験したことがない中で試行錯誤し、必死に知恵を絞る毎日でした。

また、新年度となった4月以降、教職員は原則在宅勤務としたことから、教職員間の連絡手段やデータ・情報共有方法の構築、遠隔でのホームページや教材等の作成、家庭との双方向的な連絡方法の確立等、新たな課題が山積することとなりました。

本校では、教員の業務に関しては、区から配布されている教員用タブレットPCの家庭への持ち帰りを可とし、GmailやGoogleドライブ等を活用してデータを共有することで業務改善を図りました。

さらに、今後のオンライン授業の実施に向けた準備として、オンライン会議用アプリを活用した学年会や職員会議等を段階的に実施するとともに、学習用動画の作成・編集作業を進めることなどによって教員のICTスキルの向上を図り、臨時休校期間中のオンラインによる朝の会や授業、学習用動画の配信等につなげることができました。オンライン朝の会には、不登校だった子どもも参加することができ、画面上には子どもたちの笑顔がはじけていました。

## 学校再開、そして

長い臨時休校、分散登校期間を経て、6月22日から通常授業が始まりました。子どもたち全員が揃っての学校再開を一番喜んだのは、私たち教職員だったと思います。子どもたちを前にした先生たちの目の輝きが違いました。主事さん方の張り切りようも違いました。子どもたちと過ごせる毎日の素晴らしさをあらためて実感しました。

通常登校が始まって2週間経った7月上旬のある日、6年生の保護者から声をかけられました。「子どもが学校がつまらないと言いついたんです。今までこんなことは一度もありませんでした。理由を尋ねると、楽しみにしていた1年生のお世話がなくなり、給食は一言もしゃべってはいけな。夏休みの日光林間学園も中止。運動会や学芸会もどうなるかわからない。このままだと思いつに残るようなことが一つもなく卒業になるのではないか。そんなことは、いやだ。」

学校が再開して、どの子もうれしそうに登校し、授業にも落ちついて集中して取り組んでいるように感じていましたが、私には大切なものが見えていなかったようです。あらためて学校再開後の教育活動を振り返ってみると、子どもたちの成長のためにこれまで大事にしてきた活動が、すっぽりと抜け落ちていたことに気づきました。

全校児童が一堂に会する全校朝会で、高学年の立派な態度をほめること、2年生がリーダーになって1年生に学校案内をすること、異学年交流活動で6年生が最上級生としてのリーダーシップを発揮すること、全校児童が声を合わせ、心を一つにして歌うこと。

学校という場でなければできないことをやらなければ、それは学校教育の危機です。どのような状況であっても思考停止にならず、本当に大切なことは何かを考え、どうすれば実現できるのか知恵を絞り、制約を乗り越えるために周りを巻き込みながら前に進むのが校長の使命です。新型コロナウイルス感染症下での経験を生かし、学校教育の新たな価値を生み出していきたいと決意を新たにしています。

\*



### コロナ禍における学校教育

千代田区立麹町中学校校長 長田 和義

東京都内公立中学校教諭から1年間の環境省派遣、府中市教育委員会指導主事、新宿区立新宿中学校副校長、新宿区教育委員会統括指導主事、新宿区立牛込第二中学校長、新宿区教育委員会教育指導課長を経て令和2年度から現職。千代田区中学校長会長。東京都中学校長会研究部長。

#### 未知の感染症への対応

未知の感染症に対しては、安全・安心の視点からより安全・安心な方向へとの思考が働きます。生徒間の物の貸し借り、配布物の渡し方（手で触っていいものか等）も含め、何をどこまで徹底していくか、学校で議論を繰り返しました。

私は、最上位の目的を常に意識すること、「どうすればできるか」とさまざまな可能性を探ることを基本的な姿勢としました。また、状況は刻々と変わることから、まさに走りながら解決していく、判断の変更はあり得ることを職員に周知しました。

新年度が始まり、教育委員会事務局とも協議し、入学式を実施しました。入学式は、新入生及び保護者に、中学生としてスタートしたという自覚をもたせることはもちろん、心配なことがあったら「中学校を頼ってかまわない」、「相談ができる」というメッセージを直接伝えられる場であると考えました。

校長の経営方針と教育活動の目的については、教職員に丁寧に説明し、生徒のことを第一に考えていくようにしました。教職員からは、宿泊という方法を取らなくとも、代替の方法で実現しようとする新たな提案が出されるなど、従来の方法に固執することなく、目的を達成するための具体策を提案できる学校組織に変化しました。

#### 教育活動の実践

##### (1) 生徒とつながる、つなげる

6月までの休業期間中の当初は、電話での家庭連絡が中心でした。その後、教科書を各家庭に配送し、家庭における具体的な課題を提示するとともに、オンライン環境構築のための家庭への機器の貸し出しを行いました。併せて、教科の関連動画の作成、オンライン教材活用の案内を進め、生徒との朝の会を、オンラインで行うなどの実践も始めました。校長からのメッセージ、各学年教員の自己紹介など、学校が生徒とつながる、つなげる工夫を進めました。

6月からの分散登校では、生徒の生活リズムを構築する視点から、できるだけ登校の機会を設ける工夫をしま

した。クラスを前半と後半に分けて、午前と午後それぞれに登校させ、3時間程度の在校時間を設定し、翌日は午前と午後の登校を入れ替えました。午前と午後で同一内容の学習を行い、登校できない生徒のために授業内容の要点提供、オンライン質問教室を実施しました。

##### (2) 広げる（活用方法の拡大、そして豊かな発想）

千代田区ではTeamsを導入し、生徒とオンライン上のやりとりが可能となりました。教員も活用について互いの実践を学び合い、機能を知り活用シーンを広げ、より効果的な方法を模索しスキルを高めていきました。

集会は、すべてオンラインで実施、安全指導等においても各クラスをつなぎ、全校生徒が意見交換できる手法も導入し定着してきました。

学校行事の体育祭と文化祭は、来賓や保護者の参観は取りやめ、当日オンラインで中継しました。著作権への対応も処理をすることで、当日の音声を流すことも実現しました。「どうすればできるか」豊かな発想が職員の中に根付いた結果、柔軟な対応が広がってきたと捉えています。

#### 学校からの情報発信

先が見通せない状況では特に、学校の方針、対策、生徒のようすなど家庭への適切な情報発信は欠かせません。しかし、直接多くの人を集めて伝えることは難しく、学校方針の説明、新入生対象の学校説明については、プレゼン動画を作成しホームページ上に掲載しました。また、Teamsを活用して单元テストの案内、授業関連の資料提供など情報提供に努めました。さらには、コロナウイルス感染症にかかわる人権上の配慮も欠かせません。朝礼で扱い、学校だよりでも発信するとともに、各クラスにおいて教員一人一人の思いも加え指導しました。

#### これからの教育の再構築

「学校でしかできないこと」「学校だからできること」このことを最優先に考えようとした一年でした。これからの教育を考え再構築する機会としていきます。 \*

# コロナ禍での学校行事への取り組み

杉並区立荻窪中学校長 小澤 雅人

1958年東京都生まれ。東京都内公立中学校教諭、東京都公立中学校教頭から東京都教育庁人事部管理主事、東村山市教育委員会指導室長を経て、東京都内公立中学校三校の校長を務め現職。元東京都中学校長会会長。元全国中学校学年学級経営研究会会長を歴任。

## はじめに

令和2年度から、新型コロナウイルス感染対策を講じながらの学校運営が継続されている。それぞれの学校で学びの保障とともに学校行事の実践に向けた工夫や見直しが行われた。オンライン授業等のリモートでの実施も始まり、学校でのリアルな関わり合いの減少が懸念されている。授業等でGIGAタブレットの活用やICTの活用が学校運営の大きな視点とされてきている中で、自身の人事異動もあり二校における実践を述べていきたい。

## コロナ禍に直面した学校

令和2年3月から政府の要請による学校休校が始まった。年初から、新型コロナの感染状況の報道に少しずつ関心が高まり、学校現場で心配されていた休校措置が現実となった。年度末を控え教科の履修状況への対応や、3年生の入学選抜への対応、学年末考査の処理、卒業式卒業関連行事への対応等、さまざまな課題への準備と対応とともに、生徒への休校期間中の学習面をはじめとする指導への準備に追われた。

このような中、独自に取り組んでいたWEB教材の配信を、臨時措置として各家庭で利用可能となるように契約会社との交渉をいち早く進め、休校中の家庭学習での教材の配信を行った。また、教育課程編成において標準授業時数よりも多く計画してことで、2月末の時点で全教科ともほぼ修了できる状況であり、履修内容の補充としての家庭でのWEB教材を活用した復習として行うことができた。3年生の入学選抜は、休校措置初日に行われた都立の選抜結果の発表で全員が幸いにも進路が決定でき、胸をなでおろすことができた。

しかしながら、卒業式に関連する学校行事への準備や実施内容の見直しとともに、生徒のいない学校で、卒業への準備をはじめとする学校運営を行うことが、こんなにも切ないものであったのかという思いを忘れることはできない。

## 二校での卒業式

休校中に前任校で、PTA会長との懇談で、卒業を迎える3年生は、かつて東日本大震災の影響で卒園式と入学式が簡素化したものとなっていたことを知り心が動か

された。3密回避や飛沫感染防止対策を講じるために、参加人数を制限し合唱を規制するなど内容を変更しながらも、生徒たちと感動が共有できる式の実施を教職員と模索し、毎週1回の生徒登校日を活用して卒業式の練習を行い、生徒たちの気持ちを継続させていった。3年生全員で行っていた『門出の言葉』においては、教職員と生徒たちで3年間の思い出の映像を作成し保護者に観ていただいた。また、校長式辞は毎年印刷物も式当日に配布していたが、式の中での音読は一部に留め、生徒代表に卒業の思いを伝える時間を長く設けることとした。校庭での歓送会も事前に時間を在校生に伝え、自主的な参加としたものの、多くの生徒たちと保護者で卒業生の門出を見送ることができた。

異動後の現任校においては、2度目の緊急事態宣言発令の中で、令和3年度の卒業式に向けた準備が始まった。教職員と保護者からも、できる限り門出を祝うことを願う声が寄せられ、緊急事態の動向を見ながら計画と準備を行い、リモートでの在校生や保護者の参加形態も検討した。式場内スペースの確保と参加人数を試行錯誤し、短時間での練習と卒業関連の行事との関係を考えることとともに、延期した修学旅行の実施と代替行事の計画等も平行しての準備となった。卒業式実施の直前に緊急事態宣言は解除されたが、在校生は各学年の代表生徒のみの参加で実施した。予行練習の中での卒業を祝う活動を実施するとともに、その映像を式当日にも流し、録音した校歌合唱は、その後も斉唱の代替に活用している。

## ICTを活用した特別活動の実施

電子黒板型プロジェクターが既設されている中で、タブレットの生徒配備等でICT機器の環境が大きく前進したことで学校行事等の準備や実施方法も改善が進んだ。生徒会の諸活動もリモートでの実施が可能となり、生徒総会、委員会活動、生徒会選挙、ホームルームの開催もタブレットやリモートコミュニケーションアプリを活用することでさまざまな形態で行うことが日常化した。ICT機器の活用推進が授業だけではなく、コロナ禍におけるさまざまな学校行事の工夫や見直しを拡大した。特別活動の広がりこそ学校教育の根幹と捉え、生徒たちのコミュニケーションスキル向上に繋げていきたい。 \*

# コロナ禍における安全な学校教育を目指して 台東区立蔵前小学校長 針谷 玲子

東京都内公立小学校教諭から世田谷区教育委員会指導主事、東京都教育庁指導部指導主事、同研修センター主任指導主事（人材育成）、台東区教育委員会教育改革担当課長を経て現職。文科省全国的な学力調査に関する専門家会議委員、いじめ防止対策協議会委員、元全国小学校道徳教育研究会会長。

### コロナ感染防止対策のための学校休業

令和2年2月末、6年生の謝恩会準備を保護者と行なっていたとき、学校休業のニュースが入りました。本区では発表翌週の火曜日からは休業に入ることになり、保護者への周知、家庭学習の課題づくり、低学年児童を学校で預かるための準備等に追われました。先生方にも土日に出勤してもらって、対策を練り上げました。

翌週の月曜朝会では、密を避けるために、全校放送で児童に経緯と今後の対応を知らせ、その後各学級担任が児童に丁寧の説明しました。特に卒業を控えた6年生からは不安の声が多く上がりました。

その後、3月末までの約4週間の休業中は卒業式の実施方法や休み中の児童の家庭状況の聞き取り、さらに年度替わりの準備、特に新年度の教員の異動準備に忙殺されました。卒業式練習はまったくできなかったため、当日の朝少し早く6年生に登校してもらっての証書授与の練習、当日式場に参加できる保護者も各家庭2名と制限し、来賓なし、国歌と区歌、校歌斉唱も呼びかけもなしの寂しい卒業式でした。

### 休業延長による新学期の取り組み

令和2年度は本校にとっては新校舎2回目の新学期、2学級急増で新1年生は4学級、異動者も多数となりました。入学式がいつできるのか、いつ学校がスタートできるのか、先行き不透明で不安な新学期でした。5月に5年生の霧ヶ峰移動教室を控え、オリンピック・パラリンピックに備えて通常夏季休業中に行う4年と6年の林間学園も1学期中に行うこととしていたため、その対応に追われました。

児童には、学級編成替の連絡や教科書の配布、新年度の新担任の発表等があります。児童や保護者が登校できない状況でどのように知らせるかの検討も重ねました。また、休業中でも仕事があるため子供クラブを利用する児童が多数おり、学校での預かりも同時進行で検討しました。

課題については担任がプリントを作成し、PTAと相談して各家庭に郵便にて送りました。保護者へのメール通信を活用してHPに通知を掲載していることを伝え、日々更新して新しい情報を伝えました。学年のページも作成し、担任から児童へメッセージを伝え日々家庭学習を実

施している児童への励ましの言葉や難しい宿題の解説を掲載しました。

### 6月からの分散登校と授業日の延長等の取り組み

6月からの分散登校に向けて、5月中に保護者と児童に分散方法を周知するとともに、児童一人一人のカウンセリングを担当が行いました。カウンセラーも週3日来校し、児童の悩みを受け止め、生活指導部が中心となり学区内の見回りも重ねました。

6月からの分散登校は混乱なく、嬉しそうに登校する児童の姿がありました。密を避けるための生活指導の見直し、毎日の校舎内消毒、給食開始後は複数の教員が常に教室に入り、空き時間の先生はまったくなく、緊張した日々でした。校外学習はすべて中止でしたが、6年生だけは台東区内のホテルに宿泊し、台東区内の歴史文化を学ぶ一泊二日の移動教室を実施しました。夏季休業日が短縮され、感染対策のための窓を開けての学習では冷房が効かず体調を崩す児童もあり、健康管理の見直しを行いました。6月末からは通常の授業を行うようになり、ようやく一息ついた状況で2学期を迎えました。

### 警戒宣言の再発令による教育活動

2学期は感染対策を行いながらの学校生活を送る中、11月に一人一台のタブレット端末が配布されました。次の休校に備えてタブレットを活用した授業を先生方が工夫したことで急速に児童の活用能力が向上していく様子を頼もしく思いました。

12月に予定していた「蔵前音楽祭」では、感染者数が急増したことによる保護者参観の中止、そのために児童は無観客で演奏しその様子をビデオ配信というスタイルを取りました。他にも年度末の保護者会、新1年生保護者会もすべてビデオ配信にて実施、保護者の校舎内立ち入りも遠慮してもらうことになりました。それでも今年の卒業式はスタイルを変えながらも無事に行うことができました。卒業生が一人ずつ語った将来の抱負は大変立派でした。

令和3年度はさらに3学級増全校児童682名でスタートしました。警戒宣言が継続され、ある意味慣れもありますが、児童が落ちついて学習に向かう毎日が続きます。窮屈を嘆くばかりではなく、新しいことにチャレンジする学校としたいと考えています。\*